

平城京外京の地割計画寸法

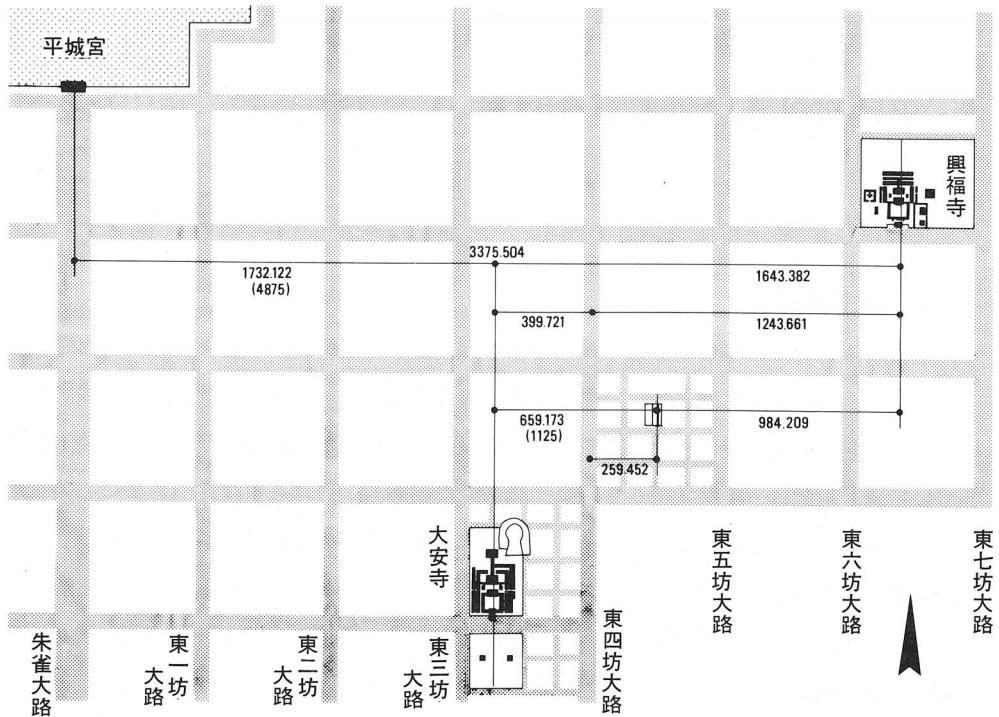
西 崎 卓 哉

I はじめに

平城京の条坊には左京のさらに東へ大きく張り出した部分があり、一般に外京と呼称されている。外京の条坊地割については、遺存地割や興福寺など寺院の伽藍配置の検討をもとにした復原研究が進められてきており、その範囲は東西が東四坊大路から東七坊大路までの三坊、南北は一条南大路から五条大路までの四条あるいはこれの北へさらに一条を加えた五条とされている。¹⁾また、左・右京に比べて東西方向の地割寸法が短いことがすでに指摘されており、このことをもって外京の設定時期が遅れることの証左とする見解もある。²⁾地割寸法が短いことの要因を造営基準尺の相違に求めるか、地割計画寸法を減じたと考えるかは議論の分かれるところであるが、いずれにせよ左・右京とは異った外京の条坊計画があったことはまちがいなかろう。しかし、これらの議論は机上の大縮尺の地図をもとに、あるいは確認されていない条坊遺構を想定してのものであり、不確定な要素も少くない。従来、外京城での条坊関連遺構の確認例がほとんどなかったことがその最大の原因なのであり、近年の調査成果をもとに再度検討を要する部分もあると考える。そこで、³⁾小稿ではわずか2例ではあるが外京で確認された条坊道路遺構と従来の研究成果をもとに、外京の条坊地割について基礎的な検討を行う。

II 外京の地割計画寸法の検討

外京の計画寸法と実長 外京のみの地割寸法はつぎの方法で知ることができる。まず、興福寺伽藍中軸線は外京三条四坊五～八坪の南北中軸線と一致していると考え、朱雀門心との東西距離を求める⁴⁾と国土方眼方位で3377.46mとなる。⁵⁾ところが平城京の造営方位は国土方眼方位に対して東西方向、南北方向ともにふれていることが知られており、正しい地割寸法を知るために条坊道路のふれを求めて修正しなければならない。そこで、ここでは朱雀大路のふれ N0°15'41" Wを援用し修正すると3375.504mとなる（以下、造営方位の修正は朱雀大路のふれを用いて行う）。つぎに、大安寺伽藍中軸線と朱雀門心との東西距離を求める⁶⁾と国土方眼方位で1741.71mあり、修正距離は1732.122mとなる。大安寺の伽藍中軸線は左京六条四坊の中でも東三坊大路心から東へ1坪分の位置にあると考え、今仮りに大路心心間1500大尺の地割計画寸法で計算すると、朱雀門心から大安寺伽藍中軸線までの東



第1図 各地点間の距離（単位：m）

西計画寸法は $1500\text{大尺} \times 3\text{（坊）} + 375\text{大尺（1坪）} = 4875\text{大尺}$ となる。この計画寸法でさきに求めた朱雀門心から大安寺伽藍中軸線までの東西距離を除すと1大尺あたり 0.355307m という値が得られ、これが左京造営基準尺の実長であると考えられる（以下、1大尺の実長はこの値を用いる）。この基準尺で朱雀門心から東四坊大路心までの東西距離つまり左京の実長を求める $0.355307\text{m} \times 1500\text{（大尺）} \times 4\text{（坊）} = 2131.843\text{m}$ となり、これをさきに求めた朱雀門心から興福寺伽藍中軸線までの東西距離から減じた値 1243.661m が東四坊大路心から興福寺伽藍中軸線までの実長つまり外京での実長となる。

ここで、今求めた実長と大路心心間の地割計画寸法を 1500大尺 とした場合の東四坊大路心から興福寺伽藍中軸線までの計画距離とを比較してみよう。興福寺の伽藍中軸線は東六坊大路心の東1坪半のところにあるとえたので、東四坊大路心からの計画寸法は $1500\text{大尺} \times 2\text{（坊）} + 375\text{大尺} \times 1.5\text{（坪）} = 3562.5\text{大尺}$ となり、これに基準尺の実長を乗じた値 1265.781m が計画距離となる。ところが実長は 1243.661m であったから、その差 22.12m （約 62.3大尺 、小尺に換算すると約 74.7尺 ）だけ実際の距離が短いことになる。では、この差は東四坊大路以東の大路心心間計画寸法を均一に狭くしたためのものなのであろうか、あるいはこの間の一部の計画寸法をとくに狭くしたことによるのであろうか。それとも、大路心心間の計画寸法は変更せず基準尺の実長を短縮したのであろうか。検討してみよう。

外京五坊坊間路 外京の条坊道路のうち五坊坊間路は発掘調査により確認されている。
外京五条五坊の七坪と十坪との坪境での検出例¹⁰⁾と、同じく五・六坪境小路との交差部での
検出例¹¹⁾の2例である。このうち前者は南北約70m分を検出しており（第2図）、その報文
は以下のように記している。

「東五坊坊間路SF01（略）地山に整地土を盛って路面としているが、削平のため、整
地層は路上北寄りの部分に約20cmまで残るにすぎない。発掘区内での路面幅は5.5～6.3m
を測る。東西両側溝を有し、両者心々間の距離は8.0m（27尺）内外に落ち着く。」

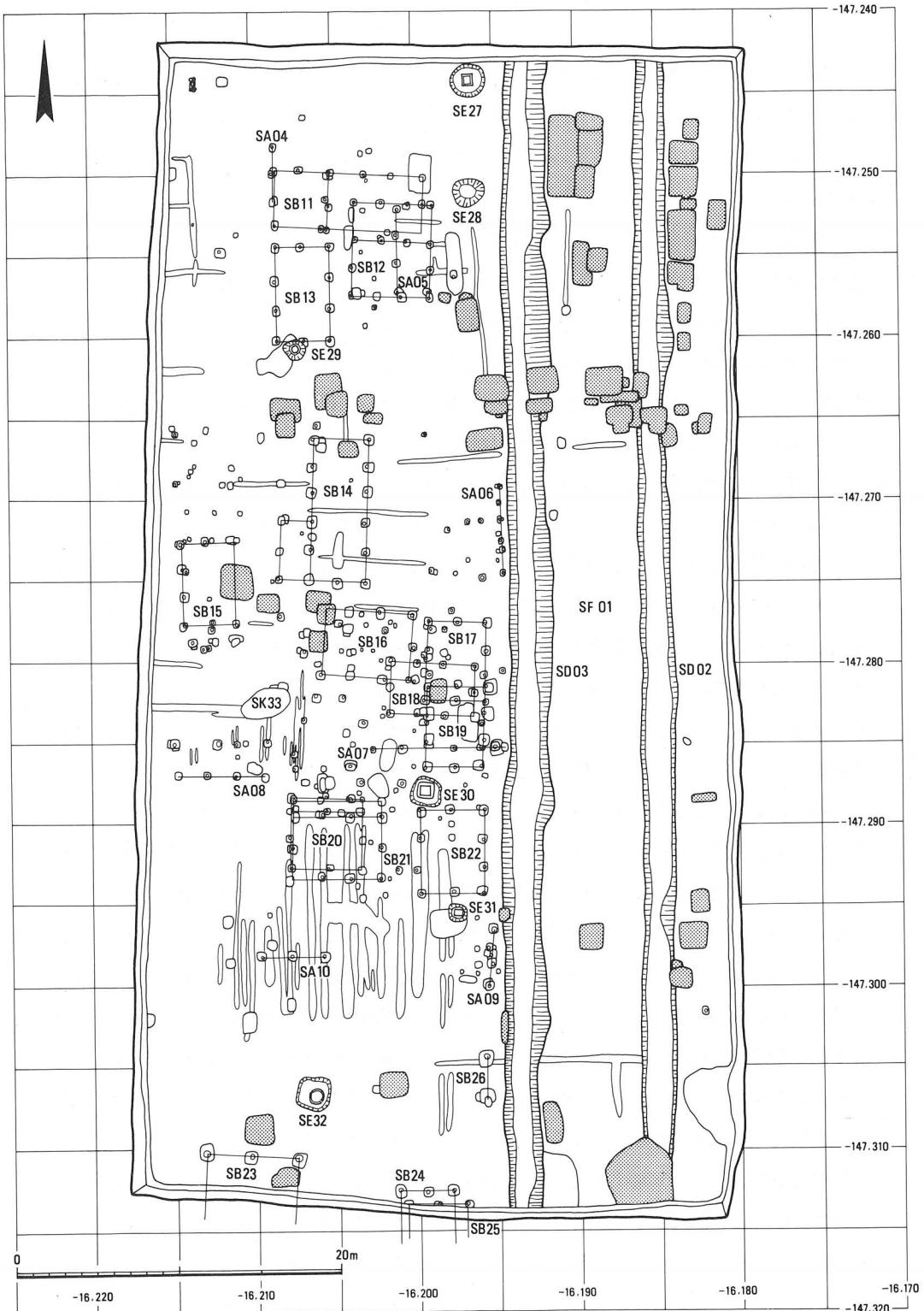
東側溝SD02（略）幅1.6～2.0m、検出面からの深さ40～45cmを測る。（略）発掘区の
南端近くで、東側に全長約8.0mにわたって、護岸施設かと考えられる杭列痕跡が認められ
た。径10cm内外で、10～15cm間隔で打ち込まれる。

西側溝SD03（略）幅1.9～2.8m、検出面からの深さ50～55cmを測る。東岸が侵蝕を受
け、路面の方へ緩やかに広がるために、東側溝に比して若干幅広である。（略）」

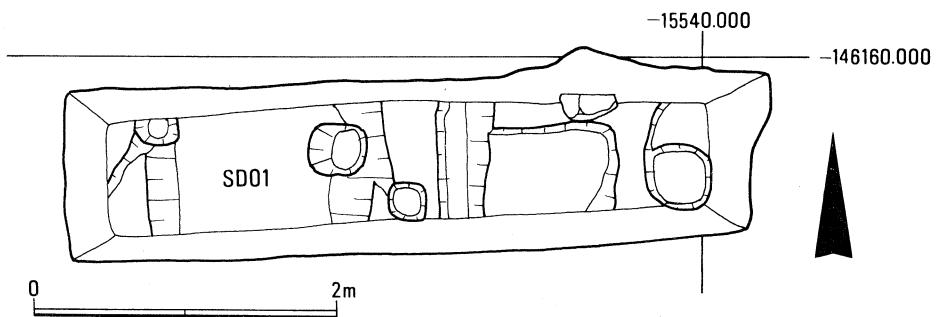
この検出例によって知られる五坊坊間路心とさきの大安寺伽藍中軸線の東西距離は国土
方眼方位で655.47mあり、これを修正した実長は659.173mとなる。大安寺伽藍中軸線から
東四坊大路心までの計画寸法は3坪分、1125大尺であると考えられるので実長は399.721m
となり、これを659.173mから減じた値259.452mが東四坊大路心から五坊坊間路心までの実
長である。ここで、再びこの実長を大路心心間の地割計画寸法を1500大尺とした場合の東西
距離と比較してみよう。五坊坊間路は東四坊大路と東五坊大路の中央を通っているので、
東四坊大路心から五坊坊間路心までの計画寸法は $1500\text{大尺} \div 2 = 750\text{大尺}$ であり、これに
基準尺の実長を乗ずると266.480mとなる。ところがさきに求めた実長は259.452mであった
から、この部分で7.028m（約19.8大尺、小尺に換算すると23.7尺）の差がある。

のことから、東四坊大路心から東五坊大路心の間ですでに計画距離が短縮されている
ことがわかり、7.028mを20大尺とみなすならば、東四坊大路心から東五坊大路心までの計
画寸法は1460大尺であろうことが想定できる。ところがさきに求めた東四坊大路心から興
福寺伽藍中軸線までの東西距離での短縮寸法は22.12m（約62.3大尺）であったから、さら
に東五坊大路以東で22.3大尺の短縮があることになる。ここではつぎの例から東五坊大路
心から六坊坊間路心までの計画距離が狭くなっていると考える。

外京三条六坊十・十五坪境小路 この小路に相当する位置での発掘調査で南北溝が確認
されており¹³⁾（第3図）、その報文は「SD01 南北方向の素掘り溝。幅1.4m、深さ0.3mを
測る。埋土からは8世紀代の瓦片、土師器、須恵器や円筒埴輪片などが出土した。SD01
心は、周辺の発掘調査成果からみて、推定十・十五坪の坪境小路西側溝心よりも大幅に西
へずれる。十坪内の溝と考えることができよう。」としている。ところが、これまでの検



第2図 五坊坊間路 (1/400)



第3図 三条六坊十・十五坪境小路東側溝（1／50）

討で外京の地割寸法は五坊の部分すでに短縮されていることが知られたので、改めてその位置を検討してみる。

検出されている溝SD01心と朱雀門心の東西距離は国土方眼方位で3043.51mある。これの修正値は3042.723mであり、これから、朱雀門心から東四坊大路心までの東西距離2131.843mを減じた値910.88mが東四坊大路心からSD01心までの東西距離となる。今仮りに東五坊大路心から東六坊大路心の計画寸法も五坊と同じく1460大尺であるとする、東四坊大路心から三条六坊十・十五坪境小路心までの計画寸法は2555大尺となる。さらに坪境小路の側溝心心の幅員が20大尺であるとすれば、東側溝心までの計画寸法はその半ば10大尺を加えた2565大尺となり、さきの東西距離910.88mは2563.6大尺に換算できるので両者が近似した値であることが知られる。つまり、SD01は東四坊大路心から東六坊大路心の大路心心間計画寸法を1460大尺とした場合の六坊十・十五坪境小路東側溝に相当することになるのである。これまでの検討では短縮寸法は62.3大尺であり、これを60大尺とみなすことが許されるならば、計画距離の短縮は半坊あたり20大尺で1坊半の間に限ってみられなければならない。ところが、六坊十・十五坪境小路は東四坊大路から1坊半とさらに1坪の位置にあるにもかかわらず、短縮された大路心心間計画寸法での小路相当位置にあることになり矛盾する。そのため、ここではあえてつぎのように推測する。

東四坊大路心から六坊坊間路心までの1坊半は地割寸法が狭められており、大路心心間あたり1460大尺で計画されたと考える。この場合、1坪の東西幅は道路心心で $1460\text{大尺} \div 4 = 365\text{大尺}$ となる。そして、六坊坊間路以東の地割寸法は再び大路心心間あたり1500大尺の計画にもどるとすると、1坪の東西幅は375大尺となりさきの検討とは矛盾するので、興福寺の主要伽藍が西接する東六坊大路の位置を、その条坊計画線は六坊坊間路の東750大尺（大路心心間1500大尺での半坊幅）に設定しながら、実際は西へ20大尺ずらしたと考

えてみる。つまり、東六坊大路の条坊計画線は道路心ではなく、みかけの道路心より20大尺東へよっているとするのである。こうすることによって六坊坊間路心と実際の東六坊大路心の東西寸法は大路心心間1460大尺で計画した場合と同じ730大尺となり、さきのSD 01の位置が外京三条六坊十・十五坪境小路東側溝として適當なものとなるだけでなく、全体の短縮寸法も60大尺となり実長とほぼ合致する。

基準尺の実長の短縮 ここまで、外京の東西方向の地割寸法は地割計画寸法を短縮することによって狭くなっているという視点で検討してきた。つぎに、計画寸法は変更せず基準尺の実長を短縮した可能性あるいはまったく異った尺度を使用した可能性をも検討しておこう。

東西坊大路心から五坊坊間路心までの実長は259.452mであったから、これを1坊分の実長に換算すると518.904mとなる。この実長を計画寸法1500大尺で除すと0.3459mとなり、1800尺では0.2883mとなる。前者はさきに求めた1大尺の実長の0.974倍、後者も1尺の実長の0.974倍である。当然のことながら、この値はこれまで京造営基準尺の実長とされてきた長さに比べかなり短いが、そこに短縮の原則を見出すことは困難であるようにも思われる。また、1尺の実長が0.3459mあるいは0.2883mとなる尺度はこれまでに知られておらず、異った尺度を用いたことにも無理がある。このようにみると、外京の東西方向の地割寸法の決定にあたっては大路心心間の地割計画寸法が短縮されたと考えることが妥当であろう。

III おわりに

以上の検討をつうじて外京設定時期の遅れを積極的に肯定せねばならない理由は見出せなかった。むしろ、「興福寺を平城の最優最適の地に造営し、しかもこれを京内とするために、とくに外京を設けた」とする大岡実の所論に頷首すべきかとの感がぬぐえない。もちろん、興福寺の造営経過を論ずることは筆者のよくなじうるところではない。しかし、大路心心間の計画寸法を短縮しながらも一定の原則は失っていないことや、興福寺の位置する七坊の計画寸法を短縮していないだけではなく、東六坊大路を実際には西へよせて建設することにより寺地の拡大と短縮の原則の確立を同時に計っていることが想定できることからは、興福寺の寺地の決定と外京の条坊計画の策定が同時に行われたであろうことが察知される。

外京の東西方向の地割寸法が短いことは以前から指摘されており、小稿の意図はそこに短縮の原則を見出すことにあった。平城京跡のように企画性に富んだ大規模遺跡における

遺構相互の位置関係の検討は、各遺構の位置をもっとも客観的に示すことができると考えられる国土座標系上の座標値をもとに行なうことが有効であるにもかかわらず、現状では充分に検討できるだけの確認例はなく、わずか2ヶ所の発掘例から臆測を重ねる結果となつた。このような段階での判断が誤ったものになりがちであることは知りつつも、これまでの検討によりひととおりの説明は可能であると考える。ただ、座標値をもとにしての検討に終始し、その結果を具体的な地形や遺存地割にあてはめての検討にまでは至らなかつた。たとえば、遺存地割にみる各大路間の距離は東四坊大路～東五坊大路が¹⁶⁾537.0m、東五坊大路～東六坊大路は516.0m、東六坊大路～東七坊大路は523.0mであり、とくに東五坊大路～東六坊大路の距離が短くなっていることに対してはこれまでの検討では説明がつかない。また、外京が奈良盆地東縁の丘陵傾斜地に造営されていることから生ずる各地点間の座標値上の距離と地形に則した実距離との誤差をどのように処理するか、などの問題が残る。今後の課題である。

- 1) 関野貞が『平城京及大内裏考』東京帝国大学紀要工科三(1907)において復原して以来、外京は東西が五坊から七坊まで、南北が二条から五条までとするのがほぼ定説となっているが、岸俊男は「平城京の復原的調査研究」『平城京の復原保存に関する調査研究』(奈良市1972)及び「第Ⅲ章 遺存地割地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』(奈良市1974)において外京一条の存在を推定している。
- 2) 「第VII章 平城宮の諸問題」『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第十五冊(奈良国立文化財研究所1962)
- 3) 平城京の条坊制度に関しては数多くのすぐれた論考があり、ここではそのすべてを挙げることはしないが、とくに井上和人「古代都城制地割再考—藤原京・平城京を中心として—」『研究論集VII』奈良国立文化財研究所学報第41冊(奈良国立文化財研究所1984)に啓発された点の多いことを記しておく。
- 4) 興福寺の伽藍中軸線の位置は奈良国立文化財研究所作成地形図「興福寺編集図」(縮尺1000分の1)において測定した。中金堂の身舎南側柱通中央間中点の座標値をX=-146415.5 Y=-15208.85とする。
- 5) 伊東太作「第V章考察 1 遺跡 D造営尺」『平城宮発掘調査報告IX』奈良国立文化財研究所学報第34冊(奈良国立文化財研究所1978) X=-145994.49 Y=-18586.31
- 6) 距離や基準尺は、原則として小数点以下第4位を四捨五入し第3位までを表示することとし、必要に応じて第6位までを表示した。よって、2点間の距離と、その2点間をさらに細分した距離の和とを比較した時に一致しない場合がある。
- 7) 平城京の条坊方位は国土方眼方位に対して北で西へわずかにふれているのみならず、各々の条坊道路によってふれの度合いが異なることが知られつつある。このような場合、基本となるべき条

坊方位のふれをどう求めるかによって成果は大きく変わってくる。ちなみに $1'$ のふれは1000mあたり平行方向ではわずか0.4mmほどの差でしかないが、直角方向では約30cmの差となる。外京の三条坊方位のふれを確認できる例は今のところ知られておらず、ここでは東西方向、南北方向ともに朱雀大路と同様ふれていると仮定する。

- 8) 大安寺伽藍中軸線の位置は奈良国立文化財研究所『平城京左京六条三坊十四坪発掘調査概報』(奈良市教育委員会1978) の「大安寺伽藍復原図」において測定した。中門南側柱通中央間中点の座標値を $X = -148092.1$ $Y = -16844.6$ とする。
- 9) ここでは、外京の造営にあたっても令大尺が使用されたものと仮定する。たとえば、本文中で検討するように、東四坊大路心から五坊坊間路までの実長259.452mは大尺では730.2大尺となるのに対し小尺(大尺の実長 ÷ 1.2)では876.3尺となり、この間の計画計離との差7.028mも大尺では19.8大尺となるが、小尺では23.7尺となるなど、大尺に換算した方がより区切りのよい整数に近い値がえられる。このことをもってのみ外京の造営尺を大尺であったとするにはあまりに根拠が薄弱であろう。ただ、京の地割計画には区切りのよい整数値(大尺・尺)をもってあたっていることが知られつつあり、その意味においては大尺で考えた方がより区切りのよい整数に近似した値がえられることに注意すべきであると考える。
- 10) 『平城京左京(外京)五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』(奈良市教育委員会1982)
- 11) 「平城京左京(外京)五条五坊坊間路発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和56年度(奈良市教育委員会1982)
- 12) 前掲註10 P.46
- 13) 「平城京左京(外京)三条六坊十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度(奈良市教育委員会1985)
- 14) 前掲註13の調査時の実測図において測定。 $X = -146161.0$ $Y = -15542.8$
- 15) 大岡実『南都七大寺の研究』(1966) P.10
- 16) 岸俊男「第Ⅲ章 遺存地割地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査概報』(奈良市1974)